「発見の連続」「日本を見つめ直した」….

スペイン・米国・ニュージーランド・ドイツ

留学体験記

長期交換留学、中期留学、夏期留学（短期）の各プログラムに参加した４学生の体験記を紹介しよう。語学の習得だけではなく大学で授業を受け、留学仲間やホームステイ先での交流など海外での生きた体験を新鮮な感性でつづってもらった。

寄稿

スペイン　バルセロナ大学に長期留学

田畑　利洋（経済４）

▲　一緒に活動したサッカーチームのメンバー（前列右端が田畑さん）

授業で語学力の進歩感じた　本場でサッカーのプレーも

1カ月半の語学研修は10人前後のクラスで、文法の学習を基本にペアワークやディスカッションを行いました。アメリカ、イタリア、ブラジルなどさまざまな国の学生が集まるクラスで、それぞれの文化や生活習慣を知り、有意義でした。

授業は週に2回と多く、とても濃い内容でした。

大変だったのは、授業スタイルの違いでした。向こうの教授はほとんど黒板を使わず、ひたすら話します。現地の学生は半期で履修するので、夏休みには、独自に語学学校を探し3週間通学。語学力を向上させ、9月から大学で正規の授業を履修しました。日本の大学で通年科目の量をそれを聞きながらノートを作っていく。聞きながら書くという作業は簡単にできるものではありません。テープレコーダーを使い、テキストを読み返すなどして復習を続け、何とか授業内容についていけるようになりました。

授業の進め方に適応するのに苦労しましたが、年明けあたりから会話がはっきり聞きとれるようになり、語学力の進歩が感じられたので、そこから帰国まで、時間がたつのはあっという間でした。

授業を離れると、サッカーが趣味なのでバルセロナは天国でした！　毎週行われるリーガ・エスパニョーラの試合を、ある時は友人の家でピザをつまみながら、ある時は小さなバーで観戦。数回ほど直接スタジアムで観戦し、生の雰囲気を堪能しました。

また、自分自身もフットサルとサッカーを現地の人とプレーしました。サッカーができたことは勉強のストレス発散にもなり、親しい友人ができてコミュニケーションの上達につながったので、とても有意義でした。

今回の留学は、周りの人に支えられて1年間無事に過ごすことができたと思っています。専大に客員教授として在籍していた先生や友人がいろいろな面で助けてくれ、その存在は、とても心強いものでした。1年間の海外生活を通して将来自分がどのようにして生きていきたいのか、ビジョンが少し見えた気がします。

本当に充実した1年間でした。

ニュージーランド　ワイカト大学に中期留学

森川　ちはや（商　3）

▲　ホームステイ先で（右端が森川さん）

スポーツしながら会話磨いた　「自国」を話せる大切さ実感

ニュージーランド第4の都市ハミルトン市のほぼ中央にある家庭にホームステイしました。一家の長女は結婚して家を出ており、次女はオーストラリアに留学中。私と同い年の海軍入隊希望の女の子が以前から下宿をしていました。

ご夫妻はとても社交的で、週末はゲストを招くれるので、現地のありのままの生活を体験。ホームステイならではと思いました。

話題は、捕鯨問題やニュージーランドとの習慣の違いなどです。私の趣味は写真。ホストマザーの友人の女性カメラマンが家に来た時は、作品を見せてもらいながら話が弾みました。彼女の家族とはロード・オブ・ザ・リングのロケ地にもなったスキー場に行き、スノーボードを楽しみました。スポーツをしながらの会話は、身構えることなく自然に言葉が出るので、留学の成果を実感しました。

ワイカト大学の語学学校には、さまざまな国籍の学生がいます。クラスには、中国、韓国、サウジアラビア、タイ、ベトナム、チリ、フランスなどからやって来た学生がいます。授業ではお互いの国について説明し、意見を交換し合い、そこから国民性の違いが明らかになり、非常に興味深いものでした。私は自国に関しての知識が乏しいことを実感、反省させられました。

留学の準備は一段一段階段を上って行くように進んでいきました。入学当初から留学を希望していたものの、英語力は中期留学の条件を満たしていなかったため、大学2年次の夏から奮起してTOEFLの勉強を始めました。やっと手に入れた中期留学の参加資格でしたが、事前研修では周りの人たちが流暢（りゅうちょう）に英語を話し、ついていくのに必死。不安でいっぱいでした。

しかし、4カ月間の充実した留学生活が送れたのは、簡単な言葉で自分の気持ちを伝える努力をしたこと、一緒に行った専大生と刺激し合い高め合えたこと、誰とでも笑顔で接したことだったと思います。

米　オレゴン大学に中期留学

太田　大地（法　3）

▲　オレンジコーストで

常識が常識でなくなった！　日常の発見が留学の醍醐味

留学する前は「期待しているほどの成果が得られないかもしれない」という考えが私の頭から離れませんでした。

しかし「自分のやりたいことをやりぬきなさい。迷っていたら何も始まらないよ」と母親が励ましてくれ、後押ししてくれました。

こうして、アメリカのオレゴンに留学、約5カ月間滞在しました。

最初は不安でいっぱいでしたが、多くのことを学びました。

世界各地にそれぞれの国民性がありますが、実際に触れてみると、興味深いことがたくさんあります。アメリカの中では、オレンジ州の人は優しく、気さくで楽しい。それに比べニューヨークの人はせわしなく、どちらかというと冷たい印象を受けました。どちらにしても日本人にはない面を持っています。

外を歩いている時、いきなり話しかけられ、長時間、話をしたことに気づきます。日本では知らない人と道で長時間会話することはまずないでしょう。

宗教についても考えさせられました。イスラム教では断食があり、それは貧しい人の気持ちを分かち合うためだといいます。それを知って感動し、今まで持っていた宗教に対する偏見が少しなくなったと思います。

留学体験で、日本という国を客観的に見ることができ、帰国した時に日本の良いところ、悪いところを実感させられました。

日本人にありがちな行儀よくふるまう態度は、逆に冷たく見られる。これには一番驚きました。今までの常識が、自分の中で変わってきたことに、その時初めて気づいたのですから。

勉強してきただけでは分からない発見がたくさんあり、その発見こそが留学の醍醐味（だいごみ）です。留学前の私だったら、醍醐味は単に「英語」そのものと答えていたでしょう。今はそのようには考えておらず、留学は何よりも自分を成長させる絶好の機会だと思います。

たった5カ月間でも、その経験はこれからの人生に役立つものになると信じています。

ドイツ　マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク夏期留学に参加

宮本　勇太朗（文　2）

▲　ホームステイ先のホストマザー・ファザーと

ドイツ人は皆ビール好き？　文化の違いに発見の連続

ドイツに着いて最初の夕飯。目の前には1人2、3個に分けられたパンと、テーブル中央の皿に盛られたチーズやハムがありました。ドイツでは昼食にボリュームのある食事をするので、夕飯は日本の朝食のような感じです。

「さあ、召し上がれ」と言われたものの、一体どうやって食べてよいものか分かりません。果たしてこのチーズやハムは手づかみしてよいのか、それとも手元のナイフで切り分けて持っていくものなのか。小分けにされたラディッシュはパンに乗せるのか、そのまま食べるのか…。

就寝時も、しばらくベッドの横に立って考え込んでしまいました。掛け布団をめくった下に、ふたつ折りにされた布団がもう1枚挟まっていたのです。掛け布団にしては厚いけれど敷布団にしては薄いこの布団は、なぜふたつ折りにされているのか。考えた末掛けて寝ることにしましたが、翌朝ホストマザーが掃除してくれた後、やっぱりもとの位置にふたつ折りにされているのでした。

戸惑うのも当然。僕はドイツ語の勉強はしましたが、ドイツの文化については表面上のことしか知らなかったわけですから。「グローバル化が進む今の時世にカルチャーショックなんて」と言っていた僕が、カルチャーショックを受けることになってしまいました。

もしかすると皆さんは、ドイツ人といえばビールとソーセージがつきもの、と考えるのではないでしょうか。僕もそうでした。ドイツではみんながソーセージを食べながらビールを飲んでいると思っていたのです。

しかし外国人が日本にきて忍者がいないことに驚くように、僕もドイツでビールを飲む人が意外にも多くないことや、ソーセージを見る機会も少ないことに驚かされたのです。ドイツ人には下戸もいますし、ソーセージよりも安価で量のあるピザをよく食べていました。こうしてまたも僕はショックを受けたのです。

笑ってはいられません。僕が19年間築いてきた常識が少しずつ崩れていったのです。ドイツの留学で、外に目を向けることの必要性を、身をもって感じたのでした。